

## ■特集 アディクションと「変身」〈斎藤学論文集Ⅲ〉

## 特集にあたって

### —アディクションと「変身」—

斎藤 學  
(家族機能研究所代表、精神科医)

#### 夏目漱石における変身

最近まで、夏目漱石の『明暗』という小説に出てくる主人公とその妻の変身について書いていた。『明暗』では主人公・津田由雄とその妻・延子が変身するのである。「暗」は汚れて黒い、それが洗われて白くなったのが「明」。洗う時の洗剤が「お清」という元芸者という設定になっていて、ことに気づくのに、ずいぶん時間を使った。津田は半年前にお延（お延）と結婚しているのに、この結婚前後に身を翻して去った愛人・清子（お清）がなぜ自分を捨てたかが気になってお延を愛せない。

この津田というのは自分がハンサムであることを自覚していて、それを確かめるために鏡に自分を映すような男である。つじつまが合って都合の良さそうな時には平気で嘘をつく。自分にはそれが許されていると思っている。この幼稚なナルシシストに我が身を託そうと一度は考えたお清は何度も彼の瞳をじっと見つめて真実を確かめようとした。そしてその都度、失望の苦笑いのうちに自分の真心をしまい込んだ。そして津田に縁談の話があることを知ったのを機に、身を翻して津田から去った。

お延はお清のように目立つ美人ではないが、白い肌と情熱的な瞳を一重まぶたに修めた現代（大

正初期）的な女性である。作家・漱石にとって現代的、つまり西洋的ということはそれ自体汚れであつたらしい。お延は「私があの人を愛している以上、私はきっとあの人の瞳を私だけのものにしてみせる」という慢気に満ちている。普段のお清の動作は緩慢だが、津田から去ったときには飛行機のように素早かった。一方のお延は何事もテキパキとことを進めるが、津田のこころをつかみかねると悟った時には不安に駆られるだけで動きが取れなくなった。

というようなお膳立てを整えたところで、作家・漱石は大正5（1916）年12月9日に胃潰瘍で死んでしまった。新聞連載小説『明暗』は前月（11月）21日の入院日までに第188回まで書きためてあつたので、その後の展開は11月の残り9日分と12月に入ってからの31日分で、計40日、つまり40回分となる。さて、この40回で上記3名はどのように動作し、言動するか、思うところを述べよ、と漱石・夏目金之助は我々に挑戦していると思う私である。お清は汚れ落としの洗剤にすぎないと既に私は見抜いたわけだから、実は3人ではない。漱石は40回にわたって、津田由雄とその妻・お延、2人の行動・言動を描いて読者を思索に誘おうとしたであろう。

その私は精神科医だから、この『明暗』という精神医療小説の読み手としては最適、しかも高齢者となって呆けを伴う居直りも極まっている。と

いうわけで津田とお延の「変身」のサマを漱石氏に代わって『毒親って言うな!』(扶桑社)という本に書いてしまった。なぜ『明暗』が精神医療小説かというと、津田の大学時代の貧乏友人・小林という精神科医役のキャラクターが登場して、ナルシスト津田の虚像を残酷に引っ張るがそうとするからだ。友人・小林は津田由雄の痔瘻を切開した肛門科医師・小林と同名を付されることによって、作家により、医師として働くことを指示されている。

この貧乏人の社会主义者によって嘘だらけの安定を揺るがされた津田は、湯河原温泉に滞在中と聞いたお清を追い、そこで彼女が自分から去った理由を問いただそうとする。しかし湯に浸かった津田は自分の部屋への帰り道に迷ううちに廊下の洗面台とそこに貼り付けられた鏡の中に「死人のように青くなった自分の顔」を発見する。ナルシスト津田は作家・漱石の筆で、作家自身の死の前に死を宣告されているのである。

さらなる一撃は「死にかけた自身の顔」を見た翌朝、訪れたお清の部屋で、お清の例の「見つめ」に襲われた時である。津田はお清の視線ビームによって自らの嘘と倨傲を焼却される。ここで漱石の筆は絶たれた。

後はたぶん以下のようなになるだろう。瀕死となった津田はその午後、横浜の生糸商人の誘いでお清とともに宿近くの不動の滝への散歩に出る。しかし横浜の夫婦2人を先に行かせて津田とお清は滝につながる階段を降りずに林の中で立ち話をする。ここで津田はお清から決定的な戒飭を受け、例の熱視線ビームに無防備にさらされることによって完全に「変身」する。未熟なナルシスト津田は成熟したナルシスト津田に変換される。

漱石は友人・小林による戒飭に16回分(152~167回)も使っているので、お清の戒飭もそれだけの手間をかけた徹底的なものになっていると思うが、その詳細を漱石風に語ることは後日の楽しみに取っておくことにする(ヒントは生前の漱石がアチコチに並べておいてくれた)。

というところで、この津田の変身の瞬間を見ていた者がいるのだ。津田の妻・お延である。彼女は津田の湯河原行きの時、自分も連れていく

れるものと思い込んで旅支度をし、津田に止められたというエピソードが語られている。そしてたぶん、津田が旅立った直後にお延の背を押した者がいるのだ。それはたぶん、津田に湯河原行きをそそのかしたものと同一人物であろう。津田の勤め先の社長の妻、津田夫妻の仲人の1人である。思い詰めていたお延の動きは速い。津田が湯上がりの廊下で迷子になっていた頃には既に小田原あたりに泊まっていて、翌日の昼までには湯河原の旅館の一つに荷を預け、午後に入って不動の滝あたりで津田の動きを探っていただろう。

こうした探偵行動を漱石はひどく嫌っていたというが、だからこそ、その行為をお延にさせたと思うのである。そしてお延はそれらしい人影を滝の上の林の中に見出す。彼女は崖沿いの階段を上り、2人連れのうち男の方の背中側に回って2人の動作をうかがう。視線は夫・津田由雄の背中、そして向かい合うお清の美しい顔に届く。が、その話の内容まではわからない。しかし2人の人物の間に流れる緊迫の感じは伝わってくる。それはお延が怖れつつ期待していた仲睦まじいものではなかった。そのうちお清の瞳からはあらゆる毒と汚れを焼却する熱射線が飛び出し、距離を置いて対面していたお延もこの焼却ビームを浴びる。夫が若い女性と対面していることに衝撃を受けていたお延の「こころ」はお清のビームを浴びることで「真っ白」になる。ここで漱石は、妻・鏡子がそれに陥ることによって常々心労させられていた必殺の疾患名を繰り出すのである。

ソムナンビュリスト(夢中遊行者)がそれで、『明暗』の177回、宿で迷子になり、洗面所の鏡の中に「自分の幽霊」を見た翌朝、その前後の体験を振り返って「ソムナンビュリスト」のような気がしたと考えさせている。私ならこれをヒステリック朦朧状態と診断するであろう。

こうした「真っ白頭」のままで、お延はフラフラと滝に向かう。お延はもはや津田由雄に誇った「(夫のためなら身を捨てる)勇気」も「慢気」も失ってしまった。自分の(現代流の)個性を失ったお延は自分の身体を玩具の人形のように水に投げ出す。ここは作家・漱石の妻・鏡子(なんと、彼女の本名はキヨである)が熊本での結婚3年目、

流産の後、ヒステリー発作を起こし、藤崎八幡宮近くの白川井川淵に身を投げて自殺を図ったことを反映させたはずだ。なぜなら、『明暗』は、漱石が鏡子夫人のために捧げた50歳記念のラブレターだったから。

漱石・夏目金之助は癪持ちのバタラーで、鏡子は夫の暴力と罵詈雜言に耐え続けた。小説『明暗』はその男が算えて50歳になる大正6年正月元旦を期に自己の汚れと倨傲を捨て、純白の愛を妻に捧げることを誓うための作品だったのだ。

湯河原・不動滝の滝壺に身を投げたお延は横浜の生糸商夫妻に助けられ、濡れた衣装のまま岸で震える。お清と別れた津田は、これも頭真っ白になりながらも下の方から聞こえる常ならぬざわめきに引き寄せられ、滝壺近くに妻・お延を見出して愕然とする。この時を機に津田由雄は純白の「こころ」をもって再生する。転げるよう崖を駆け下りお延に近づきながら由雄は旅館で貸された上物の西洋式毛織物でしつらえた襦袢を脱ぎ、濡れたお延の衣装をはがす。現れ出るのはお延の真っ白な裸身、和式の美。これに由雄は洋式の毛織物を被せる。自分の裸身は宿に引き返しお延が由雄の入院の前日にたった1日で仕立てた銘仙の綿入り襦袢を着せるつもり。この部分はテクスタイル(織物)をテクスト(原文)ないしコンテクスト(文脈)に置き換えた漱石らしい工夫で、この夫婦の関係(つまり夏目金之助・キヨ夫婦の関係)が津田由雄(つまり夏目金之助)の洋風かぶれによる現代式ノイローゼにすぎないことをキヨに理解させ、自分が銘仙という和式織物つまり純和式文体にいっそうの工夫を凝らすという新年に当たっての抱負を読者に向かって宣言したかったのだと思う。

### エビィの変身

変身(断酒)したエビィがブルックリンのビル(のちのA.A.創始者の1人)の前に現れ、ビルはエビィの変身を羨んだ。これがビルの変身を導き、やがてビルはアクロンのボブに出会った。その半年後、ボブは変身し、ビル、ボブとそれぞれの伴侶であるロイス、アンの4人は床に跪いてオックス

フォード・グループ流の6ステップの祈りを神に捧げた。ボブことドクター・ロバート・ハルブロック・スミスが変身(断酒)した1935年6月10日がA.A.神学におけるA.A.誕生の日にされている。

この4人を変身させたのはエビィ、エビィを変身させたのはローランド・Hという人で、このローランド・Hの変身を導いたのはカール・ユングというつながりになる。そう考えて、ビルはA.A.がホームカミング(20歳)を迎える前にチューリッヒのカール・ユングにお札の手紙を書いた。それがまだ存命していたユングに届いて返事が来たと、A.A.の機関誌『グレープ・バイン』に書いた。

アクロンでビル、ボブとその配偶者たちが跪いて祈ったオックスフォード・グループ風の6ステップの祈りとは人の変身を促すものだったが、このグループではこの変身を「コンバージョンconversion」と呼んだ。コンバージョンは日本語では回心と訳すらしいが仏教では「えしん」と読み、改心と同義に用いていると聞く。コンバージョンは普通「転換」と訳すが、以下に記すような事情で筆者には、この転換という言葉の方がオックスフォード・グループの創始者フランク・ブックマンの体験に近い気がする。

ペンシルヴェニア出身のアメリカ人フランク・ブックマンの父祖はスイスからの移民だが、オランダ系移民で敬虔なルター派プロテスタントが移植していた地域で育った。ルター派会派の牧師としての活躍はアメリカでは挫折し、故郷を離れた。スコットランドを旅行中の1908年、コンバージョンを体験し、これをオックスフォード大学などの高等教育機関の教職員や学生に伝えようとした。このブックマンのコンバージョンとは、礼拝中に自分の罪を実感する体験をして、彼と対立していた同僚すべてに謝罪の書簡を送り、恨みから自らを解放したという(アーネスト・カーツ著、葛西賢太、ほか訳:アルコホーリクス・アノニマスの歴史、明石書店、2020./Kurtz, E.: Not-God, Hazelden, 1979)。

ブックマンの工夫は、これを演説や説教の形ではなく、気楽な、しかし落ち着いた雰囲気のホームパーティの形式で知的議論として伝えていくことにあった。この際、彼はこれを現行の宗教とは

別のもの、あたかもナザレ人イエスが磔刑を科された、その場に居合わせた人々のように語り会うことを目指したので、自分が企画した会を「第1世紀キリスト者共同体」と呼んだ。そういうわけで19世紀末にイングランド国教会の中から生じた排他的な宗教活動であるオックスフォード運動とは区別すべしと前掲カーツの本の註(41頁)にあるのだが、私たち、少なくとも筆者には間違えたくても間違いようがないほどに無知な領域の話である。そんな筆者にも興味深いのは、後述する16世紀のルターの宗教改革や、その後に次々に起こる福音(ナザレ人イエスの刑死を全人類の罪を背負っていただいたという「ありがたいこと」として知ること)に関する興奮や共鳴が繰り返して起こるらしいことである。

この種の原始返りがキリスト教の本質で、その都度現行の教義へのアンチテーゼになるとすれば、カルヴァニズム(労働こそ神の恩寵、その報酬の貯蓄は神のご意志に添う)が資本主義というテーゼ(命題)を生んだというマックス・ウェーバーの立論は、そのアンチテーゼ(反命題)としての共産主義という一党独裁無神主義に至るわけだ。そしてその後(共産主義信仰への幻滅)に生じた新興宗教の乱立とアディクションの蔓延こそ、ジンテーゼ(統合命題)ということになる。

ここでようやく、カーツの前掲書の原著(英語)のタイトルが「Not-God(神ではない者)」とされていたことの意味するところがわかつてくる(最近出版された邦訳のタイトルからは「Not-God」が省かれている)。酔いは人を神にするが、これは単なる勘違い。真の神と接するには「あんたは Not-God(神ではない者)」、「私も Not God(神ではない者)」、「あんたと私との良き関係(フェローシップ)の中にこそ神は降りる」という認識が必要だ。これを精神分析的な用語で言うと、誇大性を伴う自己膨張的で未熟な自己愛を戒飭によって制御し、対象の認識によってしか現出し得ない自己(これを「自己対象」と言う)の成熟を促すという話になる。このような認識に到達した時、自己は変身する。断酒はその一表現にすぎない。

ブックマンをリーダーとするオックスフォード・グループの姿勢は一見、非宗派的なものだつ

た。話し相手がどの会派のピューリタンであろうと、例えカトリックであろうと問題にならなかったし、そもそもその場をキリスト教の布教活動と見られることさえ嫌った。温かい雰囲気と相互の存在を認め合う、この座談の場所こそ自分の求める居場所(フェローシップ)であると参加者たちに感じさせたかったようだ。

とは言え、オックスフォードの教職員、学生に焦点を絞り、共鳴者を増やしたブックマンの戦略は「宣教師として」巧みであったし、集会の後半には神と向き合う瞑想をして、そこから神の声を聴き取るという段取りがあった。そしてそれが真的神の声であったのかを否かをオープンに話し合う時間を持つのがこのグループの特徴であったそうだ。その判断基準についての話は縷々あるのだが、ここでは省略する。

## 福音主義の源流と資本主義の出現

「福音」と、それに伴う変身という概念が現代社会に及ぼした圧倒的影響については16世紀のマルティン・ルター(1483～1546)に遡って見ておかなければならない。福音主義は16世紀前半のルターの義憤(インディグネーション)に始まる。この怒りを理解するには、キリスト教における「罪」と「罰」の区別を知らなければならない。罪の方は消しようもないが、罰の方は「善行」でもって軽減ないし打ち消しができることになっていて、その善行の中にローマ・キリスト教会への「寄付」が含まれていた。それがために寺院建設などの大出費が必要になったローマ法皇<sup>じょくしゆう</sup>が贖宥状(免罪符)なるものの売り出しに熱心であったそうで、これがルターを怒らせ、宗教改革への呼びかけを生んだ。

現在から当時の流れを見る歴史家なら、ルターの宗教改革を「読書という個人的体験」の発生と結びつけるであろう。読・聖書(ルターは聖書のドイツ語訳を最初に手がけた人ではないが、ルター訳聖書は現代ドイツ語にも決定的な影響を及ぼしているという)によって読者は、ナザレ人イエスの磔刑を我がこととして感じ、目の前に生じたこと、例えば2人のマリアが心ある富裕な商人

の申し出によって遺体を墓所の洞窟に置き、その墓所の入り口を巨石で塞いだこと、翌日そこに遺体はなく、「私は復活した」という声を聞いたこと、あの晩、あの場から逃げ出していた12人の使徒にあの晩から3日目に復活したイエスが現出したこと。読書、というか読・聖書によって読者は書かれていたことを「個人的に」受け取ることになる。ルターの場合、彼はそれを事実そのものの描写として受け入れ、イエスによる贖罪に心底から感謝した。そして聖書の1文字ずつのすべてを「良き便り」つまり「福音」と受け止め、そのような自分(ルター)とそっくり同じように考えることを人々に勧めた。

それはイエスの直弟子であった12使徒が、主の復活に触れて感じた感動と同じものに身を浸すことであり、原始キリスト教徒たちが体験した驚きに満ちた覚醒であった。しかしルターらの連鎖的感動はグーテンベルグによる印刷術の改善という技術的基盤がなければ発生しえなかつた。こうして最初の福音主義・宗教改革がまずドイツ語圏で生じ、スイスのジャン・カルヴァン(1509～1564)によってフランス語圏にもピューリタニズムが浸透し、彼らはユグノー(Huguenot)と呼ばれた。

カルヴァンは受難の時期もあったが、その人生の後半は人々に推挙されてジュネーブで30年に渡る教会権政治をしき、人々の日常座臥を宗教的規律で支配した。彼の所説は预定説と呼ばれ、罪人は救われない、救われるような人はそもそも罪を犯さないとするものであった。ただし天がお与えになった職務(職業召命觀)に忠実に従い日々365日を禁欲的に清廉潔白に過ごせば罰は軽減されるであろう、というものであった。職務に精励し禁欲的に過ごせば蓄財が進む。この蓄財をカルヴァンは容認した。

フランス語圏にあったカルヴァンの教えは、しかしカトリック大国フランスには根づかなかつた。既述のユグノーは一時期一定の政治勢力を成し、そこには貴族も王族も含まれたが、当時のフランス王朝(ヴァロワ朝)によるユグノー弾圧はサン・ヴァルテルミーの大虐殺(1572年8月24日)(映画『王妃マルゴ』)は、この複雑な歴史的事実を

扱っていて壯麗である。ただし摂政カトリーヌ・ドゥ・メディチの陰謀がすべての悲劇を招いたという作劇は一つの見方にすぎない)にまで発展し、これに続くブルボン王朝でもさらに弾圧が続いたためにユグノーは次々に母国を離れ、その多くがブリテン島、特にスコットランドに渡つた。

のこととイングランドにおけるプロテスタン卜諸派の興隆とが無関係とは思えない。イングランドはスコットランドとともに大ブリテンと呼ばれ、これにアイルランドも加える時は3王国(スリー・キングダム)と言う。その歴史が我々外国人にとって複雑怪奇と思われるのは、その上層部(王朝)が常に島外から来た武力集団であったという事実による。土着のように見えるアングル人やサクソン(ザクセン)人にもしても島外から来て地元のケルト人を奴隸化した人々であった。彼らが作った7王国はデーン人(現行のノルウェー、スウェーデン、デンマークあたりにいたノルマン人)の王クヌートにより駆逐され、北海帝国が1世紀ほど続いた。その後、フランス・ノルマンディーにいたケルト族(カエサルの頃のガリア人)を駆逐してフランク帝国の一侯国となっていたウイリアム征服王に乗っ取られ、屈服したアングロサクソン人たちは議会を即製して王権を制限するための大憲章(マグナ・カルタ)を国王に認めさせた。

その後もイングランド王家では英語を喋らない、あるいは喋れない王が英語しか喋れない貴族・臣民から成る議会と対立することがしばしば起つて、ついには富裕農ジェントリー出身のオリバー・クロムウェルの軍隊が、当時の国王で国王神授説にとらわれたチャールズ1世を軍事的に敗北させて捕虜とし、首を刎ねるということまで起つた。これがいわゆるピューリタン革命だが、ピューリタン(ピュアリティ=「純潔」に由来し、清教、清教徒と訳される)という割には血にまみれている。

チャールズ1世が間違えたのは、当時の農民たちが貧農(コターズ cottars)や富農(ヨーマン yeoman)たちだけではなかったことである。農民たちの一部はカルヴァニズムの影響のもとに蓄財に励み、貧農たちの土地を収用して、大地主と

なり、遂には貴族の下、貧農の上の階層としての中産的社会層ジェントリー(gentry)を形成するに至っていた。当時の議会には、王族・貴族の他に、新たに登場したジェントリー層が多く含まれていた。

ところでカルヴァニズム的信仰(ピューリタニズム)は、聖書の読み手ごとに個人化しやすかつたので、多くの教派に分かれた。国王ともうまくやっている人たちは(長老派)もいれば、とても一緒にやれないという分離派もいる。そもそも王の意向など歯牙にもかけないという独立派もいて、これらがさらに細かい党派に分かれている。ちなみにチャールズ1世の首を刎ねたクロムウェルは独立派の中の平等派というものに属し、鉄騎兵という貧農たちを狩り集めた「無敵の」暴力団を率いていたそうだ。

もう1つ「ちなみに」を重ねさせていただくと、1620年にブリテン島を離れて新大陸に渡ったメイフラワー号が載せた102人の乗客のうちにいた25~35名ほどのピューリタンというのは分離派の人々で、イングランド国教会の迫害に絶望していたという。メイフラワー号というと、ピューリタンだけで船(乗員が20~30名と熟達した船長が要る)を仕立てたかに思えてしまうが、実態は船客の3割前後、残りはエリザベス1世の頃から始まったヴァージニア入植地で生活を立て直そうとする労働者たちだったようだ。この船は荒天によってを目指すハドソン川河口に着けず、より西北方のケープコッドという岬の先端部に何とかたどり着いたのは雪まみれの12月。雪をかき分けて先住民の貯蔵用トウモロコシを盗んだり、貯蔵倉と間違えて雪に隠れた先住民の墓から遺体を引きずり出してしまったり、しまいには先住民を怒らせ、船で逃げて対岸のプリマスに移ったりして翌年4月、サンフラワー号が帰途につく頃には乗客だった人々は53名に減っていたという。この件は面白いことだらけなのだが、以上で省略。

いずれにせよ、カルヴァニズムはイングランドに資本主義制度を浸透させた。このことを地道な統計数字から割り出したのがマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳、岩波文庫、1989)である。

## 共産主義といふ一神教

福音主義からカルヴァニズムが生まれ、その延長上に資本主義(capitalism)というテーゼ(命題)が生まれた。ここでは株主という神父が大切にする利潤(黒字)という神が我々の頭上に置かれる。このテーゼではヒトは労働者という「物」ないし「道具」に変身させられ、労働者は生産の悦びというヒト(ホモサピエンス)固有の感動から疎外される。よって、この制度は克服されなければならない。ということで資本主義のアンチテーゼ(反命題)として登場してきたのが共産主義(communism)である。

共産主義では生産手段が人民と呼ばれる個々人に共有されるというのだが、一人ひとりの手に渡る資本財などわずかなもので、それを使って資本主義よりも効率的に利潤を生み出すことなどあり得ない。資本を個々に切り分けるというところですぐに、切り分ける主体(人民たちから選ばれた統治者)が必要になるわけで、結局は党が、というより党内の政治能力に秀でた人が独裁することになる。この統治者(書記長)は神父のはずだったのに彼自が神を演じる仕組みになってしまった。

とは言え資本主義に失望した人々の共産主義革命への憧れは、20世紀、特にその前半、世界中の人々を魅了した。それはキリスト教に代わる一神教的信念であり、これ(共産主義、社会主义)への変身(改宗)こそ未来を拓くものと考えられた。

1917年、ロシアで共産党革命が成功し、ソヴィエト連邦とコミニテルン(共産主義を世界中に拡散するための組織)が活性化すると、資本主義に絶望した世界中の青年たち、特に各国の一流大学を出た有能な人々はそれぞれの地で、革命(多くは暴力革命)を試みた。実はA.A.のビル・ウィルソンも第一次大戦からの帰還後、妻ロイスの実家の縁者のつてで、鉄道会社に入所した時、その労働組合に肩入れしすぎて解雇されている。この件は『次にまわせ(Pass It On)』(未訳、A.A.世界サービス社によるビル・ウィルソンの正伝)には出てくるがカーツの本には出ていない。

見逃されがちだが、日米開戦の頃のフランクリ

ン・デラノ・ルーズベルト（民主党）政権が、政府機関を増やし、多くの共産主義者を公務員として雇用していたことは近年世界史的に注目されるようになっている。このF·D·ルーズベルトはニューディール政策という、社会主義的国家事業（水力ダム建設など）を展開し、1929年以来の大恐慌（Depression）を脱したと言われているが、経済学者の多数はこれを政治宣伝に過ぎないとみなしている。アメリカが大不況から脱したのは、日本に真珠湾を爆撃させ、それを好機として厭戦気分にあった米国世論を沸騰させ、USAの第二次大戦参加に成功してからのことである。戦時需要は確実に着実にUSA経済を改善したが、この血の甘味が、USAを常に血の匂いを嗅ぎまわる吸血鬼にした。近年は戦闘機を売りさばくより、抗がん剤や抗うつ剤の開発の方がはるかに利益を出すことがわかり、最近の感染症問題もあってUSAは映画『バイオハザード』の出だしに似てきた。それどころか国民の収入の二極分化も進んで国家解体の兆しが見え始め映画『イリジウム』（近未来のUSAの物語。貧富の二極分化が進み、富者は成層圏外に人工衛星イリジウムを作つて不死の健康を楽しむ）の世界の到来も説得力を持つようになった。

第二次大戦後、米英仏など戦勝国側でも、負けた枢軸側（日、独、伊）でも、暴力で現行政権を倒そうとする青年たちのテロリズムが蔓延した。しかし、共産党独裁体制内の実態が暴かれ、ソヴィエト連邦が経済的に破綻すると、暴力革命論と共に鳴する者は激減した。

### 宗教としてのアディクション

こうして、政治的独裁者を「神」とする共産党的な共同体（フェローシップ）への幻想が崩壊した後、何が生じたか。大衆の胸に「神」ないし「グル」などと称する、多数の「人」が誕生した。そしてその一部からは、国家転覆を目標にテロ行為（日本ではオウム真理教事件があった）が発生した。戦後のパックス・アメリカナ（USAの統制による平和）の中で、大麻、コカイン、ヘロインへの酔いを追求して市民社会からの離脱を図る

ヒッピー・ミューンと呼ばれる運動が見られたが、むしろ「普通の人々」を怖がらせるだけに終わった。しかしこれはやがて緑色革命と呼ばれた自然回帰指向を生み、USAにおける大麻ビジネスの勃興を促す一方、地球温暖化などの環境問題への注目を促す国際運動の活発化（実際には文化的地盤沈下を挽回しようとするノルマン・ゲルマン系諸国のキャンペーン）を招いているが、いずれも全世界を視野においた普遍的な価値形成につながっているとは言いがたい。

むしろカルヴァニズム→資本主義の誕生→大航海時代→西欧人による各地人民の奴隸化と経済的収奪→その先兵となったキリスト教宣教師たちの人種差別と信者虐待（日本ではカトリック系の神父による信者女性に対する性的侵襲が未だに続いている、これに対する教団内部の自己監査も進んでいない）といった、いわゆる「コーカソイド悪魔論」とでも言うべき「中世返りした怨念」に対し充分な配慮が欠けているように思う。

欧米白人文化への復讐心や怨念は、中東、大陸中国、インド、サハラ砂漠以南のアフリカなどのナショナリズムの形でマグマを形成しており、現代欧米を覆う「反石油運動」など脳天氣かつ独善的な動きへの反発を核として進み、以後数世紀に渡って、世界の安定を脅かすと思われる。

こうした混沌の中では「唯一の真理」は提供されず、それぞれが置かれた状況の中で愛や憎しみの方向を探しかねない。情報量の圧倒的に多いUSAから聞こえてくるのはLSDやMDMAさらにコカインの相変わらずの蔓延と、医療用と称する大麻の合法化である。

しかしもっと深刻なのは人々の心が電子通信器機の作り出す仮想世界やゲーム競合に収束されていて、人々が自らの意思で依存症という「奴隸化の道」に進んでいることであろう（アダム・オルター著、上原裕美子訳：僕らはそれに抵抗できない、ダイヤモンド社、2019）。

ナショナリズムや宗教（新興のものか伝統的なものかは問わない）を越えて、今や人々の心を捕えて放さないのはスマートフォンなどの電子情報機器であり、そのうちこれがないと地下鉄にもタクシーにも乗れず、自室にも入れなくなるだろう。

既に東南アジア各国では小銭の貸し借りもドアの管理もすべてスマートフォンで済ますという国が増えており、そうした人々が日本に来て驚くのは、情報端末環境の劣悪さと未だに現金決済が横行していることだそうだ。

たみくさ、人民、市民、労働者、消費者、サラリーマンなどと呼ばれてきた、個々のホモサピエンスには、今、他者との共棲とか、価値観の共有とかの強制に縛られることなく個々に誇大妄想(自己のみから成る宇宙の中心に自己がある)に浸れる可能性が出てきた。既にネットカフェ難民とか長期滞在型マンキツ(漫画喫茶)では、これに近い生活様式をとる人々が見られる。

例えば、東京でも大田区蒲田あたりでは、1,000円で12時間滞在できる激安ネットカフェがある。そこで、そこに泊まる若者たちは、朝のうち時間1,040円の最低賃金で数時間働き、後はネカフェでゲーム三昧に過ごせるという(塙坂まさよし、ほか著:「東京 DEEP 案内」が選ぶ首都闊住みたくない街、駒草出版、2017)。

一日中妄想の世界にいれば肉体的には劣化し、今、ヒトを人らしくしている体形などにも変化(劣化)が出てくるだろうが、糸余曲折はあれ、ことは映画『マトリックス』(第1作)が示唆した方向へ進んでいるわけである。自己を作るタンパク質を抵当に入れれば金銭も不要になる。要するにアディクションが宗教を演じる世界では、ホモサピエンス個々が「神」と化し、生殖力を失った人類は姿を消すことになるであろう。おどろくほど短期間のうちに。

### 「Not-God」の共同体

今、私たちは砂粒のように孤立しつつ自己充足のカプセルに浸り込んだアディクション教徒たちに囲まれながら、自らも同種のアディクションのいくつかを抱えて生きている。それでもまだ、そのカプセルに浸りきれていないのは、なげなしのプライドと、ひどい孤独感のせいだが、同類らしき人に出会えば共依存というきわめて強力なアディクション毒に当てられ、たちまちアディクション教徒に変身するだろう。

そうした現在だからこそ必要なのが、オックスフォード・グループが目指したような「居心地の良い共同体(フェローシップ)」ではなかろうか。そこでも、ある種の決まりごとはある。例えはそれは以下のようなものである。

1. 今までのやり方では思うように生きていけないという絶望感を自分自身で納得し、それを正直に他人に語る
2. 今までの生き方ではうまくやかなくなっている、という他人の話を、口をはさまず黙って聞く
3. 他人の悩みに安易に助言しない、言い換えれば他者と適切な距離を保つ。そうすることで共依存という恐ろしいアディクションに取り憑かれることを避ける
4. そのように聞き、そのように話す人々ができる限り温かく寛容な心で眺める
5. こうして新たな知人を得たことを「自分を超えた、ある大きな者のはからい」と受け取れるように心をしなやかにする
6. この集まりに心地よさを感じ、その場にいる人々のつながりの中に神が降りていることを体験する

この種の説明は6項目にも60項目にもなるであろうが、そこで言われなければならないことは、ただ1つ。その場にいる誰もが「Not-God」(神ならざる者)であり、Godは必ず人と人の間に降りるもの、ということだ。このGodをキリスト教的存在と考える必要はない。我々人間に共有されるスピリチュアル(靈的)な感性に名を与えたものにすぎないので、日本語だとカミになる。カミは「神」か「上」だが、死んだ祖先が靈になつて今を生きる子孫を守るという祖靈信仰は北東アジア一般に見られるから、そうしたものを指してもかまわない。

アディクツ(依存症者)という自己愛破綻者をアディクションのカプセルから取り出すことで仮想の「神」気取りから覚醒させ、もう1人の孤独な人と出会わせて、厳しい孤独感を緩和する機会を与える。そんなことを企んでできる人がいるはずがない。そうしたことのすべては人の意思を超

えた大きな手による「偶然」でしかない、と思う人は多いだろう。

しかしそれに近いことを企むことは可能ではないか、と考えて始まった試みの1つがオックスフォード・グループだったのである。このグループはその後次第に宗教臭を消し、オックスフォード大学からも離れて MRA（モラル・リアーマント、道徳再武装）という彼らの理念そのものを団体名とし、その後も IC（イニシアティブス・オブ・チェンジ）と改名して啓発運動を続け、現在に至っているという。

創始者のフランク・ブックマンは、自分の創設したグループを「異端の一神教である共産主義」からの防壁としようとした。ヒットラーのポーランド侵入からソヴィエト連邦との戦争が始まると、ブックマンは防共の同志としてヒットラーを称えた。第二次大戦後は、スイスのコー（Caux）という場所にあった廃城を改装して本拠とし、人類和合への方針を各国のリーダーたちに呼びかけるなどの活動をしているという。敗戦後の日本でも、国際関係の修復に努めた政治的リーダーたちの一部は IC による仲介工作に積極的であったそうだ。

オックスフォード・グループのアルコール別働隊という位置づけだったビルたちのメンバーは、どうして 1935 年 6 月 15 日の祈りの当日にあった断酒者への「変身（conversion）」の祈念にとどまり続けられたのだろうか。他のオックスフォード・グループ成員のように第二次世界大戦（1939 年 9 月～1945 年 8 月）をはじめとする諸事への関心に向かわなかったのか。おそらく、ビルたち「アル中」の絶望と恐怖が、それだけ強かったということだったのだろう。

最近誕生した科学の1つに認知考古学という領域がある。その創始者の一人スティーヴン・ミズン（松浦俊輔、ほか訳：心の先史時代、青土社、1998）によると 10 万年前に誕生したホモサピエンスは、しばらくは他の原人類と変わらない存在として過

ごし、6 万年～3 万年の間に「文化爆発」と言えるような認知的・情緒的大転換をしたようだ。その後期には現在の私たちホモサピエンスの心の特徴であるもの、つまり「相手の気持ちを察し、相手が必要とするものを届ける行動をする」ことを身につけたらしい。そしてその時期に芸術や宗教の発生を思わせる遺跡や遺物（石器や骨）が登場するようになった。これをもたらしたものは彼らが産む子どもたちの成熟期間の延長にあったという。

女たちは子どもの成熟がいつまでも終わらない間、飢えに苦しむ。いつまでも幼い子連れでは捕食者に食われてしまう。この危機に応えようとして男たちの脳には他者の気持ちを察する部分ができた（とまではミズンの本には書かれてないが、わかりやすく言えばそういうこと）。この時にこそ、つまり男たちが自らを徹底的に利他的でしかあり得ない存在、他人に食物を捧げ続ける存在と認識できるようになった時にホモサピエンスは神とともに棲む存在になったのだと私は思う。

最後に一言。本号に収載の筆者の論考「嗜癖」（1988）の症例として提示した「ビル」の記述はいくつかの点でアーネスト・カーツの記述と異なっている。しかしそれは、筆書の空想による誤解ではない。「嗜癖」を書いた時点での筆者はカーツの原著（1979）を手元に置いていた。それを読んだ上で、当時新刊だった Alcoholics Anonymous 編『Pass It on : The Story of Bill Wilson and How the A.A. Message Reached the World』（A.A. World Service Inc., 1984）の記述に従うことにした。何分こちらは A.A. の公式文書なのだから。カーツの情熱的な筆致に魅了はされたが、キリスト教に関する詳細な記述に当惑を強いられ、読みにくい本だと感じた。今回、適切かつ丁寧な翻訳と一緒に読了し、その感動の中でこんなに長い「特集にあたって」を書いてしまった。自らの語学力不足に恥じ入っている。